

物忘れ相談コーナー来訪者の 認知症に対する意識調査

～第2報～

Survey of Possible Dementia Patients Consulting
the Forgetfulness Care Center ～ Part II ～

小池久美子¹⁾・岩織美保子¹⁾・三浦みや子¹⁾・菊島レイ子²⁾

1) 八戸短期大学看護学科

2) 医療法人平成会 八戸平和病院

要旨 平成23年9月10日、平成会主催の地域交流祭で質問用紙を用いたアンケート調査と、タッチパネル式コンピューターを用いたスクリーニング検査を実施した。調査の結果、75歳以上の後期高齢者に早急に受診が必要な人が35名中6名いることから、今や認知症は、歳をとれば誰にでも起こりうる身近な病気であることが分かった。

このことから、早期発見、予防のための対策を早急に実施していく必要があり、また認知症になった際に高齢者の方々が、療養しやすい環境作りも強化していく必要がある。

そのために私達は、地域住民の方々や病院、連携施設等と協力し予防・啓発活動や環境作り等を進めていきたいと考える。

キーワード: 高齢者、認知症、意識調査

I. はじめに

平成21年9月に平成会主催の地域交流祭で、物忘れに対する意識調査を地域住民に実施した結果、正しい知識の普及と予防対策の実施に向けた取り組みが課題であることが結

果として得られ、第1報として報告した。

それから2年経過した現在も、日本の高齢化は一層進み、それに伴い認知症高齢者数も年々増加している。今後の認知症高齢者数の

見通しも、平成37年までには約320万人になると推計され、その勢いは衰えを知らない。認知症患者の急増に伴い、高齢者の身近な病気の一つとして認知症が取り上げられるようになってきている。テレビ等のマスメディアを通して、地域住民の方々が認知症という言葉に触れる機会はより一層増えている。しかし、

その中から認知症に対する知識を十分に得て、普段の生活の中に予防策を取り入れることができているかは定かではない。

そこで、上記施設の地域交流祭で地域の住民が物忘れに対してどの様に認識し、生活しているのかを再度調査し、今後の予防活動に活かすことを目的として本研究を実施した。

Ⅱ. 目 的

地域住民の認知症に対する理解度や、現在どのような予防対策を行っているか聞き取り調査を行い、その現状と課題について把握する。

また、予防のみならず今後認知症を発症し

た場合、高齢者の方々がどのような場所で療養生活を送ることを希望しているのかを知り、その要望に応えられるような環境作り等の参考にしていくために研究することとした。

Ⅲ. 方 法

1. 調査対象

平成23年9月10日に、平成会主催地域交流祭で八戸短期大学としてブースを設けた場所に来訪した40歳前半～80歳代後半39名(男性11名、女性28名)の地域住民を対象とした。

2. データ収集方法と調査内容

平成23年9月10日、平成会主催地域交流祭にて質問用紙を用いたアンケート調査と、タッチパネル式コンピューターを用いたスクリーニング検査を実施した。調査内容は、表1に示した通りである。また、表2にスクリーニング検査の内容を示した。

質問紙によるアンケート調査時は、研究者

が聞き取り記入を行った。また、タッチパネル式コンピューターは研究者が対象者に実施方法を説明し、練習問題を実施したのちに検査を実施することで現在の物忘れレベルを判定した。

3. 分析方法

アンケート調査から得られたデータについて、単純集計と一部クロス集計を行った。

4. 倫理的配慮

平成23年9月10日平成会主催地域交流祭で八戸短期大学としてブースを設け、その場所に来場した地域住民の方に、面接によるアンケート調査を行うことを口頭で説明した。

得られた情報は、個人が特定されないようにコード化し厳重に管理すること、調査への参加は自由であり、断っても不利益が生じないこと、調査結果は個人が特定できない内容と

して学会等で公表することの承諾を得た。また本研究は、八戸大学・八戸短期大学研究倫理委員会の承認を受けた。

IV. 結 果

1. アンケート調査結果

1) アンケート回収率

アンケートは、聞き取り調査を39名に実施し回答率は、100%だった。スクリーニング検査は、39名中4名が実施せず35名の結果が得られた。

2) 対象者の属性

参加者の年齢構成は、41歳～86歳までで、70歳代が最も多く20名(51%)を占めている。

次いで60歳代(31%)、50歳代と80歳代(8%)、40歳代(2%)だった(図1参照)。そのうち前期高齢者(65歳以上74歳)の割合は18名(46%)で、後期高齢者(75歳以上)の割合は10名(26%)だった。

性別は、男性が11名(28%)、女性が28名(72%)だった。前回の調査に比べて男性の対象者の増加が見られたが、女性の対象者が男性に比べて2倍の人数となった。

3) 認知症に対する認識

認知症の認知度は、前回同様に高く82%の人が知っているという結果であった。しかし、知らないという人も7名(18%)いて前回の調査よりも増加している(図2参照)。

スクリーニング検査に関してどの様に情報を得たかに関しては、「事前の宣伝」が8名

(21%)、「来場して知った」が25名(64%)、「人に聞いた」が6名(15%)だった。

どうしてこの検査を受けようと思ったかについては、「不安があるから」が17名(42%)、「興味があるから」が17名(41%)、「その他」が7名(17%)だった。「その他」の意見の中には、担当者にすすめられたからという意見がある一方、物忘れが顕著なため、年をとったから等の意見も見られた。

4) 物忘れについて

最近物忘れを感じたことがあるかという問いについては、38名(97%)があると答えている。大半の人が、物忘れを実感していることが分かった。

あると答えた人に、どの様な時に感じたかを複数回答で回答してもらうと、最も多いのが「物の置き場所」27名(42%)、次いで「人の名前」26名(40%)だった。

その他に少数意見として、日常生活の中で感じる事として、「話の内容」や「買い物の内容」、「何をしようとしたか」等が挙げられた。

頻度としては、「毎日」・「何時も」と頻繁な人から、「月に1回」・「年に何度か」といった減多にない人とまばらであった。

5) 認知症予防に関する日常生活行動

日常生活の中で、認知症予防に関する行動をどの様にとっているかを食事面・運動面・行動面から調査した。その結果、食事に関しては塩分や脂肪分の取りすぎに注意していると答えた人が22名(56%)だった。また、食事の好みについても味付けの濃いものを好む人が22名(56%)と多かった。食事内容は、魚や野菜を好む人が多かったが、肉を好む人も半数程度見られた。調理方法に関しては、煮物や焼き物が多いが、食材に合わせて色々な方法を取るという意見もあった。間食に関しては、33名(85%)がすると答えていて果物等を好んで摂取していることが分かった。

運動に関しては、20分以上の運動を心掛けている人が24名(62%)いることが分かった。頻度に関しては、ばらつきがあるがウォーキング等の身近で容易に取り入れることができる内容を継続して行う人が多いことが分かった。

飲酒に関しては、14名(36%)が飲酒の習慣があることが分かった。喫煙に関しては、

37名(95%)が吸わないと答えている。

趣味に関しては、多くの人が何かしら持っていることが分かった。39名中無回答は、1名だった。その趣味に関しての集まり等があるかについては、21名(54%)があると答えている。頻度は、ばらつきがあり「何時もある」という頻繁な場合から「月に1回程度」という場合もあった。外出の機会がある中で、普段服装や身だしなみに気を付けているかという問いでは、30名(77%)が気を付けていると答えている。

世の中の動きに関心があると答えた人は、35名(90%)だった。

性格に関しては、34名(87%)が楽天的であると答え、5名(13%)が悲観的であると答えている。楽天的な人の割合が多いが、現在悩みを抱えているかの問いに関しては21名(54%)があると答えている。その理由として、病気のことや今後に対する不安、体のこと等が挙げられている。

今回の調査でも睡眠に関しては、約半数の人が眠れないと答えている。その際に、眠剤等を服用している人は3名でそれ以外は、読

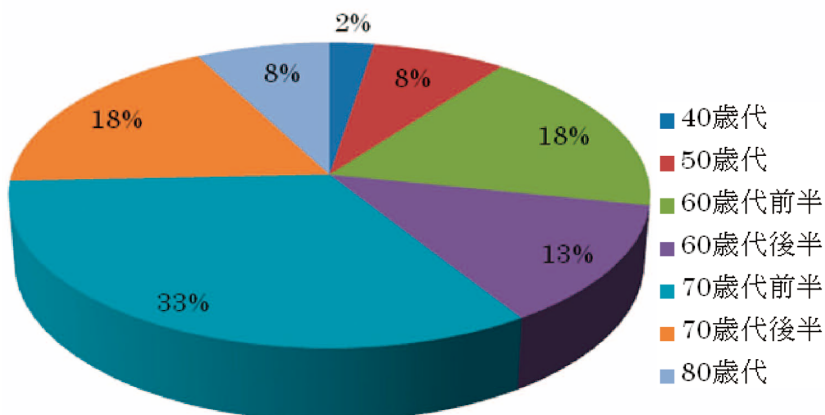


図1. 年齢構成 (n=39)

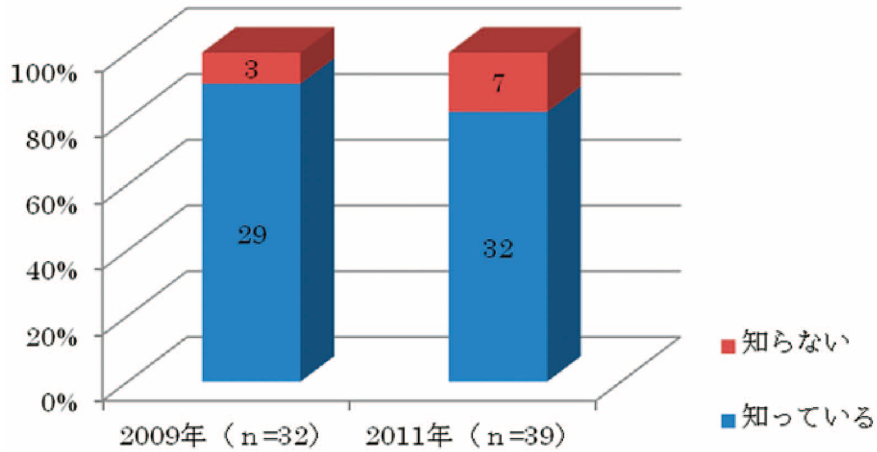


図2. 認知症の認知度比較

書や音楽を聴く等の対処をしたり眠れない時は寝ない、あきらめる等の対処もあった。

高齢者は、ちょっとした段差にもつまずきやすいとされているが良く転びますかの問いに、34名(87%)は転ばないと答えている(図3参照)。

6) 有訴率について

有訴率は、加齢による心身の変化に伴い上昇する。現在病気に罹っているか問うと30名(77%)が罹っていると答えている。疾患の種類は、様々であり1人が何種類もの疾患を併せ持っている場合が多かった。また、一般的に高齢者になると罹りやすい疾患と同じ傾向を示し、今回の調査でも最も多い回答は高血圧だった。

7) 施設選択基準について

認知症になった場合に望む生活の場は、施設が23名(59%)で自宅が15名(38%)、その他が1名(3%)であった。施設を希望

する人が半数を占める中で、施設を選択する際の選択基準を問うと、費用面を真っ先に挙げる人が多く見られた。

次いでスタッフの対応や人間関係を挙げる人が多かった(図4参照)。

2. スクリーニング検査結果

1) 認知症スクリーニング検査

タッチパネル式コンピューターを用いたスクリーニング検査の結果は15点満点中、11点が6名(16%)、12点が2名(5%)、13点が5名(13%)、14点が11名(28%)、15点が11名(28%)、未実施が4名(10%)だった。そのうち、各年代の点数分布については図5に示した。そのうち13点以上に関しては、現時点での物忘れの心配はないとされている。しかし、12点以下に関しては物忘れが始まっている可能性が疑われるため、早めに受診する必要があるとされている。今回、12点以下で対象となったのは、35名中7名(21%)で75歳以上の後期高齢者は6名(17%)だった。

V. 考 察

1. 高齢者人口の変化と認知症高齢者の増加数

我が国の高齢者人口の推移は、平成 27 (2015) 年には「ベビーブーム世代」が前期高齢者 (65～74 歳) に到達し、その 10 年後 (平成 37 (2025) 年) には高齢者人口は約 3,500 万人に達すると推測される。これまでの高齢化の問題は、高齢化の進展の「速さ」の問題であったが、平成 27 (2015) 年以降は、高齢化率の「高さ」 (= 高齢者数の多さ) が問題となるとされている¹⁾。

また、認知症高齢者数は平成 14 (2002) 年時点で約 150 万人であったが、今後一層高齢者人口の増加に伴い、2026 年には 330 万人に達する見込みである。

この様に高齢者人口が増加していく中で認知症という病気が歳をとれば誰にでも起こりうる身近な病気であるため、そのことについ

ての対策を早急に進めていく必要がある。

対策の一つは、予防活動である。また、予防のみならず認知症を発症している方のサポートも重要となってくる。そこで、前回も調査した八戸市の住民がどの程度認知症に対して認識を持ち、予防等の対策を取っているかを再度調査し、地域の特性や地域住民の要望を取り入れた啓発活動や環境整備を実施したいと考え調査を行った。

今回の調査は、前回同様実際に会場に来てブースを見てから興味を持ち検査を受けようと思う人が多かった。その中でも認知症に対する知識が十分でないながらも、年齢を重ねたことで不安を感じたり、興味が持てるような企画になっていたことが参加者の増加につながったと考えられる。

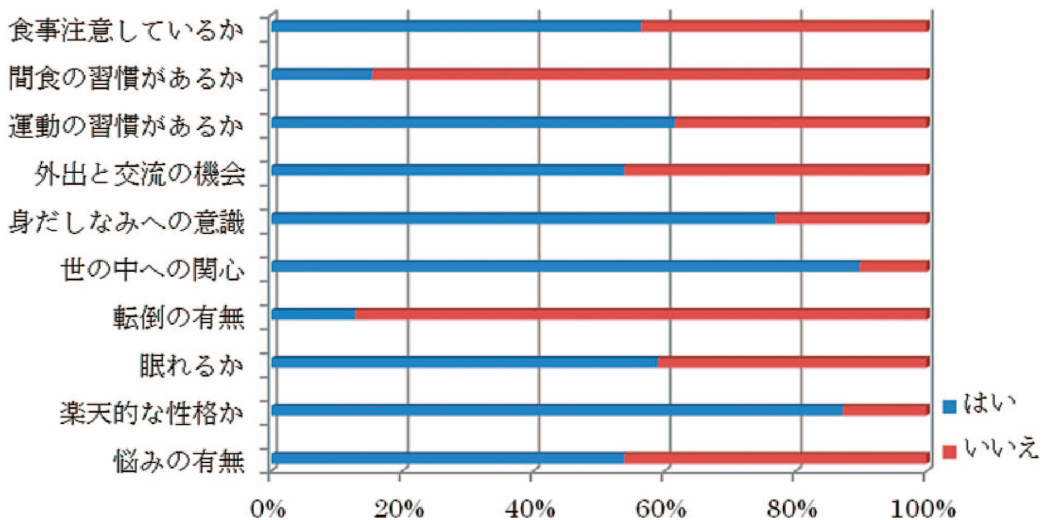


図 3. 日常生活の予防策 (n=39)

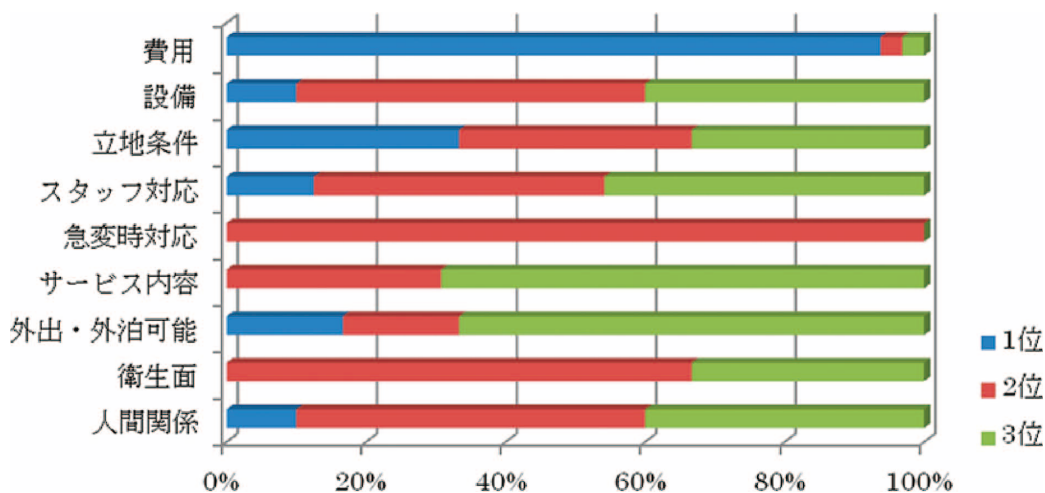


図4. 施設選択基準 (n=39)

2. 認知症についての認識と予防対策について

認知症の認識度は参加者の82%という高めの数値が得られた。前回の調査時に比べると認知度は減少しているが、前回の調査にも参加して今回も「今年はどうかと思って参加しました」と継続して調査に参加する人も数名見られた（図2参照）。活動を継続することで、地域住民の意識の向上に役立てることが出来、活動の継続化が重要であることが分かった。

矢富氏によると、早い段階からの健康な高齢者も軽度認知障害の高齢者も含めた地域高齢者を対象としたポピュレーション・アプローチの重要性が指摘されている²⁾。

そのためには、地域住民がどの程度認知症に対して知識を持っているかを確認し、現在行われている活動や予防対策がその役割を果たしているのか、今後も継続が可能であるかを判断していく必要がある。

今回の調査でも認知症の予防に有効とされ

ている日常生活の中での予防対策が、実施できているかを調査した。その結果、食事面・運動面・行動面でどの項目でも半数以上の人々が、気を付けた生活を送っていることが分かった。多種多様な疾患を併せ持つ高齢者の方々は、何かしらの生活指導を受けた経験から日々気を付けて生活することが出来ていた。

今回の調査から、日頃の生活の中で規則正しい生活を送ろうとする習慣が予防につながっているのだということを再認識できた。

3. 施設選択基準について

施設選択基準は、図4の結果に表れているように、費用について1位に挙げる人が多かった。現代の不況に伴い高齢者の生活環境も悪化していることが考えられる。国民年金の需給年齢の引き上げや、高齢者医療制度の変更に伴う医療負担の増加等が家計を圧迫している現状で、今後認知症になった場合生活の場を「施設」と考える人が増加している現

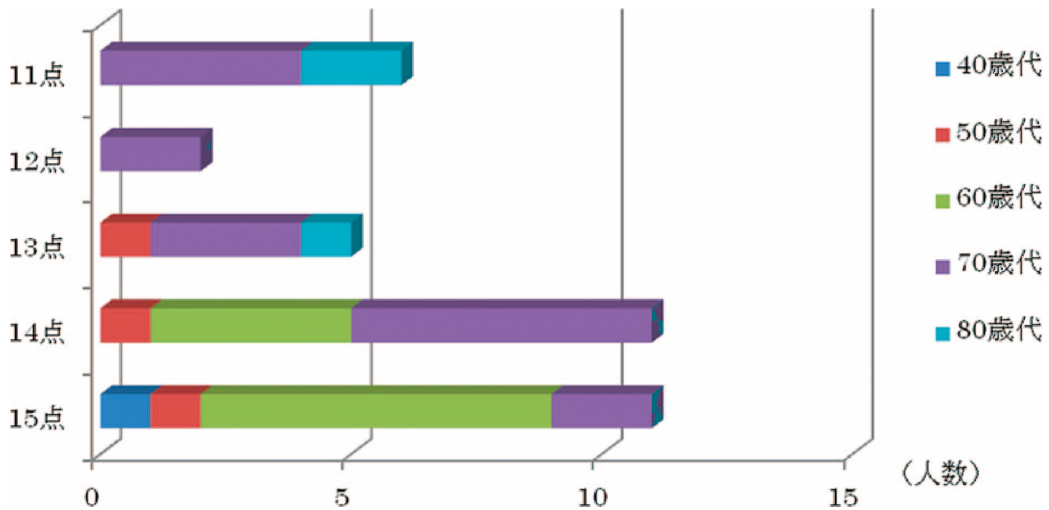


図5. 点数別年齢分布 (n=35)

状では生活にかかる費用を真っ先に考えるのは妥当な結果だといえる。

以前は、「家の畳の上で死にたい」と述べる人が多かったが、少子高齢化、単独世帯の増加、夫婦共働きなど家族を取り巻く環境の変化から、病気になった際「病院や施設のお世話になる」という考えの人が増えてきている。現に、今回の調査でも認知症になった場合に望む生活の場を施設と答えている人が23名(59%)と、自宅と答えた15名(38%)を上回っていた。高齢者の方々を取り巻く環境の変化がこの結果に結びついていると考えられ、今後も施設での療養を望む人が増加していくと考えられる。その様な現状で、高齢者が望む環境作りの一つとして療養環境である施設の整備を早急に行っていく必要がある。施設数のみならず、施設内の環境を整備していくことも重要である。そのためには、高齢者が実際に望む条件を十分に把握して施設づくりを行っていく必要がある。また、実

際に費用の次に望む条件が、スタッフの対応や人間関係などであったことから、設備だけではなく施設の運営を行っていくスタッフの整備も並行して行っていく必要がある。

4. タッチパネル式コンピューターを用いたスクリーニング検査について

タッチパネル式コンピューターを用いたスクリーニング検査の結果では、早急に医師の診察が必要となる12点以下が70~80歳代の対象者で7名だった。80歳以上になると4~5人に1人が認知症になると言われており、年齢が進むにつれて認知症でなくても認知機能が徐々に低下してきているためこのような結果になったと考えられる。

今回の調査では、高齢化に伴い今後認知症患者の増加が益々進んで行く現状を実際に知ることができた。その現状を打破していくためには、予防対策の強化が重要である。

まず、身近に実施できる日常生活の中での

予防策の徹底のため、啓発活動を強化していく必要がある。また、認知症症状の早期発見に努めるためにスクリーニング検査の普及を行っていく必要がある。この活動を地域住民がより身近に感じ、並行して実施出来る環境作りを今後も進めていく必要がある。

VI. お わ り に

先に述べたように、今や認知症という病気は、歳をとれば誰にでも起こりうる身近な病気であることが分かった。このことから、早期発見、予防のための対策を早急に実施していく必要があることが分かった。また、認知症になった際に高齢者の方々が、療養しやすい環境作りも強化していく必要があることが分かった。そこで、私達は地域住民の方々や病院、連携施設等と協力し予防・啓発活動や環境作り等を進めていきたいと考えてい

る。

謝辞

今回の調査及びスクリーニング検査に御協力頂きました39名の方々、ならびに研究の主旨を御理解いただき御協力頂きました医療法人平成会の職員の皆様、また八戸短期大学看護学科2期生高齢者グループの学生の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 総務省統計局：今後の高齢化の進展～2025年の超高齢社会像～，第1回介護施設等の在り方委員会，資料4，平成18年，9.27
- 2) 矢富直美：認知症予防の戦略的アプローチ，老年社会科学，Vol. 28, No. 3, 381-386, 2006
- 3) 総務省統計局ホームページ <http://www.caremanagement.jp/article.php?storyid=3176>
- 4) 大澤ゆかり，他：地域住民の認知症に対する関心と不安およびイメージの検討，愛知県立看護大学紀要，vol. 13, 9-14, 2007
- 5) 浦上克哉：タッチパネル式コンピューターを用いたアルツハイマー型認知症の簡易スクリーニング，治療3月増刊，1162-1165, 2008
- 6) 本間昭：地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査，老年社会科学，Vol. 23, No. 3, 340-351, 2001
- 7) 小林尚司他：三好町住民の認知症に関する知識と不安，日本赤十字豊田看護大学紀要 Vol. 4, No. 1, 21-27, 2009

表 1. 質問内容

-
- Q 1 性別・年齢について
- Q 2 認知症とは何か知っているか。
1) 今回この検査をどの様にして知ったか。
2) 検査を受けようとした理由は何か。
- Q 3 最近物忘れを感じたことはあるか。
1) どの様な時に感じましたか。(頻度)
- Q 4 塩分・脂肪分の取りすぎに注意していますか。
1) 味付けは、よく食べるものは、調理方法はどの様な物が多いですか。
2) 間食はしますか。
- Q 5 20分以上の運動をしますか。(頻度・種類)
- Q 6 お酒は飲みますか。(頻度・量)
- Q 7 タバコは吸いますか。(頻度・本数)
- Q 8 現在罹っている病気はありますか。(病名)
- Q 9 趣味は何ですか。
- Q10 趣味等のグループで集まる機会がありますか。(頻度)
- Q11 世の中の動きに関心がありますか。
- Q12 普段服装や身だしなみに気をつけていますか。
- Q13 あなたの性格は、楽天的ですか。それとも悲観的ですか。
1) 今悩んでいることがありますか
- Q14 よく眠れますか。(眠れない時の工夫内容)
- Q15 よく転びますか。
- Q16 あなたが認知症になった場合に望む生活の場は、どこですか。
- Q17 あなたが認知症になって施設に入ることになったら施設選択の基準は何ですか。
3つ順番を付けて選んでください。
- | | | |
|--------------|------|---|
| () 費用 | 【理由: | |
| () 設備 | 【 | 】 |
| () 立地条件 | 【 | 】 |
| () スタッフの対応 | 【 | 】 |
| () 急変時の対応 | 【 | 】 |
| () サービス内容 | 【 | 】 |
| () 外出・外泊が可能 | 【 | 】 |
| () 衛生面 | 【 | 】 |
| () 人間関係 | 【 | 】 |
- Q18 物忘れ相談プログラム実施結果
- Q19 プログラムを実施してみていかがでしたか。
1) 思ったより簡単でしたか。
2) 実施してみて安心しましたか。
3) その他 ()
-

表 2. タッチパネル式コンピューターを用いたスクリーニング検査の内容

Q1	言葉の即時確認テスト
Q2	年の見当識テスト
Q3	月の見当識テスト
Q4	日の見当識テスト
Q5	曜日の見当識テスト
Q6	図形の認識テスト
Q7	言葉の遅延再認テスト
